

イエスのことば 第33回

それから、ヨハネの弟子たちがやって来て遺体を引き取り、葬った。そして、イエスのところに行って報告した。それを聞くと、イエスは舟でそこを去り、自分だけで寂しいところに行かれた。(マタイ 14 : 12~13a)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで
（2020 年 4 月の第 1 回～第 9 回）

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける
（第 10 回～2023 年 1 月の第 33 回）

転：弟子訓練
（2023 年 2 月の第 34 回～

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 「承」の部において、これまでに 12 の権威を見てきた。
2. イエスの権威を認めた人物が現れた。しかし、それはイスラエル民族の中からではなく、異邦人であるローマ軍団の将校であった。ポイントは次の 3 つ。
 - (1) **背景**：これまでイエスが 12 の権威を現わし、大勢の群衆がイエスに従うようになった。しかし、ユダヤ人の指導者層は、イエスを殺そうと図っていた。イエスは弟子たちの中から十二使徒を選び、次の段階に備えている。
 - (2) **異邦人がイエスの権威を認めた**：百人隊長はローマ軍団の将校である。ただし、ローマ人とは限らない。この時期、ユダヤに駐留していた軍団は、ギリシヤ人などで構成されていた可能性が高い。しかし、いずれにせよ、異邦人である。その異邦人が、イエスの権威を認めた。
 - (3) **異邦人の救いの予告**：イエスは百人隊長の信仰を高く評価すると共に、将来、世界中の異邦人がアブラハム契約の祝福に与かることを予告した。
3. 第 21 回から、「承」の部の結末、【メシア拒否】に入った。拒否の前触れが、意外にも先駆者ヨハネから出た。獄中にいたヨハネは、イエスが本当にメシアかどうか迷い、イエスに質問を送ったのであった。しかし、イエスはヨハネについて、メシアの先触れとしての使命は果たしたこと、責任はユダヤ人の指導者層の方にあると語った。

4. 前回は、指導者層による公式の拒否を受けて、イエスが十二使徒を二人一組でイスラエルの町々に派遣したことであった。今回の第 33 回は、【メシア拒否】の最終回である。それは、先駆者ヨハネの死である。その報告を受けたとき、イエスは何も語っていない。本日のイエスのことばは、無言である。マタイ 14 章 13 節、「それを聞くと、イエスは舟でそこを去り、自分だけで寂しいところに行かれた。」

□先駆者ヨハネが逮捕された（この学びのシリーズでは、「起」の部、第 8 回で扱った）

先駆者ヨハネは、ガリラヤとペレアの領主ヘロデ・アンティパスに逮捕され、ヨルダン川東側のペレアで収監された（ルカ 3：19～20）。ヘロデ・アンティパスは、ヘロデ大王の 4 番目の妻の子。

イエスは、先駆者ヨハネから洗礼を受け、悪魔の試みを受けた後、しばらくユダヤ地方で活動していた。メシア宣言は、まだであった。ヨハネが逮捕収監されたと知って、イエスは、ユダヤを去ってガリラヤに向かった（ヨハネ 4：1～5）。そのとき、イエスと 5 人の弟子たちは、「サマリアを通過していかなければならなかった」（4 節）とある。ペレアを通るのは避けたのであった。

□先駆者ヨハネが獄中からイエスに質問を送った（「承」の部、第 21 回）

□先駆者の死（場面は先駆者ヨハネの死の後、十二使徒の派遣によりイエスの評判が領主ヘロデの関心を引き起こしたときのこと。ヨハネの死について【回想】として語られる）

項目	マタイ	マルコ	ルカ
1. イエスの評判と領主ヘロデの反応	14：1～2	6：14～16	9：7～9
2. 回想：先駆者ヨハネの逮捕	14：3～5	6：17～20	
3. 回想：先駆者ヨハネの処刑	14：6～11	6：21～28	
4. 回想：ヨハネの弟子たちが遺体を引き取り、葬った	14：12a	6：29	
5. ヨハネの弟子たちがイエスに報告した	14：12b		
6. 先駆者ヨハネの死についての報告を受けたときのイエスの行動	14：13a	6：30～32	9：10

□先駆者ヨハネの死について報告を受けたときのイエスの行動

マタイ 14：13a *それを聞くと、イエスは舟でそこを去り、自分だけで寂しいところに行かれた。*

1. そこを去り・・・そことは、宣教の拠点としていたガリラヤ地方のカペナウム
2. 舟で
 - (1) 行先は・・・ルカ 9：10 「ベツサイダ」。ガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスの領域外。領主ヘロデ・ピリポの管轄地域の中にある町。異邦人地域である。
 - (2) 同行は・・・12人の使徒たちも同行している（マルコ 6：30～32）
3. 自分だけで寂しいところへ行かれた

イエスはよく一人で寂しいところへ行かれた。目的は、祈るためである。

「承」の部、第14回では、イエスが重要な出来事や転機となる出来事の前などには、必ず祈りの時を持っておられたことを学んだ。

ルカ 5：15～16 *イエスのうわさはますます広まり、大勢の群衆が話を聞くために、また病気を癒やしてもらうために集まって来た。だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた。*

12～14節でメシア的奇跡→【16節の祈り】→17節サンヘドリンによる調査の開始

4. 先駆者ヨハネの死を知って、イエスは何を祈られたのか

先駆者の死は、メシアの死の前触れである。

イエスは、先駆者ヨハネの死を知って、ご自分の死の時が近づいたことを認識した。ヨハネが宴会の座興のために首をはねられたように、イエスもまた人々から嘲りを受け、辱しめを受けて十字架にかかることになる。その覚悟を祈りの中であらためて固め、父なる神に従い通すことを祈られたのであろう。

そして、残された時間をどのように用いるのか、弟子たちの訓練である。「奥義としての神の国」の時代において、メシアは天におられ、地上においては弟子たちがメシアの代理人として働かねばならない。

イエスの祈りをもって承の部は終わり、本格的な弟子訓練の時期、転の部へと移る。